

10/
1310/
1910/
24

ONO Kazushi

Music Director

大野和士
音楽監督

© 堀田力丸

都響およびバルセロナ響の音楽監督、新国立劇場オペラ芸術監督。1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者（現・桂冠指揮者）、カールスルーエ・バーデン州立劇場音楽総監督、モネ劇場（ベルギー王立歌劇場）音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。

2017年5月、大野和士が9年間率いたリヨン歌劇場は、インターナショナル・オペラ・アワードで「最優秀オペラハウス2017」を獲得。自身は2017年6月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra, Music Director of Barcelona Symphony Orchestra, and Artistic Director of Opera of New National Theatre, Tokyo. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. He received numerous awards including Palmarès du Prix de la Critique, Officier de l'Ordre des Arts et des Lettres and Asahi Prize. He was selected to be a Person of Cultural Merits by the Japanese Government.



第862回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.862 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2018年10月13日(土) 14:00開演

Sat. 13 October 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ピアノ ● リーズ・ドゥ・ラ・サール Lise de la SALLE, Piano

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

(プレトーク／13:30～大野和士)

【ジャン・フルネ没後10年記念】【ドビュッシー没後100年記念】

ベルリオーズ：序曲《ローマの謝肉祭》 op.9 (9分)

Berlioz: Le Carnaval Romain, op.9

ラヴェル：ピアノ協奏曲 ト長調 (23分)

Ravel: Piano Concerto in G major

I Allegremente II Adagio assai III Presto

休憩 / Intermission (20分)

ドビュッシー：管弦楽のための《映像》より「イベリア」 (20分)

Debussy: "Ibéria" from "Images" for Orchestra

I Par les rues et par les chemins 街から道から

II Les parfums de la nuit 夜の香り

III Le matin d'un jour de fête 祭りの日の朝

ラヴェル：バレエ音楽《ダフニスとクロエ》第2組曲 (18分)

Ravel: Daphnis et Chloé, Suite No.2

I Lever du jour 夜明け

II Pantomime パントマイム

III Danse générale 全員の踊り

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待) 協賛企業・団体はP.59、募集はP.62をご覧ください。



Lise de la SALLE

Piano

リーズ・ドゥ・ラ・サル
ピアノ



©Stephane Gallois

フランスのシェルブール生まれ。パリ国立高等音楽院でピエール・レアシュに、大学院課程でブルーノ・リグットに師事。そのほか、パスカル・ネミロフスキ、ジュヌヴィエーヴ・ジョワ=デュティユーにも学ぶ。これまでにルイーゼ、マゼール、ヤノフスキ、ビシュコフ、ヴァンスカ、ブロムシュテット、マリナー、パツパーノらの指揮で、シュターツカペレ・ドレスデン、ベルリン放送響、ミュンヘン・フィル、WDR響、ウィーン響、パリ室内管、チューリヒ・トーンハレ管、フィルハーモニア管、シカゴ響、ボストン響、ロサンゼルス・フィルなどと共演。リサイタルも欧米アジア各地の主要な都市で行っている。naïveレーベルほかより10代のころから数々のCDをリリースしている。

Lise de la Salle was born in Cherbourg (France). She studied at Conservatoire de Paris and obtained a master's degree at the same conservatoire. Lise de la Salle has played with orchestras including Sächsische Staatskapelle Dresden, Rundfunk-Sinfonieorchester Berlin, Münchner Philharmoniker, WDR Sinfonieorchester, Wiener Symphoniker, Ensemble orchestral de Paris, Tonhalle Orchester Zürich, Philharmonia Orchestra, Chicago Symphony, Boston Symphony, and Los Angeles Philharmonic under batons of Luisi, Maazel, Janowski, Bychkov, Vanska, Blomstedt, Marriner, and Pappano. She performs in the world's most esteemed concert halls.

ベルリオーズ： 序曲《ローマの謝肉祭》op.9

フランス・ロマン主義を代表するエクトル・ベルリオーズ(1803~69)は管弦楽作品や管弦楽付きの大規模な声楽曲などで特に知られるが、彼自身はオペラでの成功を特に望み、幾つかのオペラを手掛けた。

イタリア・ルネサンスの彫刻家ベンヴェヌート・チェッリーニ(1500~71)の自叙伝を題材とした《ベンヴェヌート・チェッリーニ》もそのひとつで、1834~38年に書かれ、1838年9月10日にパリ・オペラ座で初演された。結果は完全な失敗で、公演は4回で打ち切られる。原因は作品がオペラ・コミック(※1)のスタイルで書かれていたため、グランド・オペラ(※2)を期待した聴衆の好みと合わなかったからといわれるが、このオペラに自信を持っていたベルリオーズは1843年にオペラ中の素材をもとに新たに演奏会用序曲を作り上げ、翌年自身の指揮で初演した。それが《ローマの謝肉祭》である。オペラ第2幕への序曲として用いられることもあり、ベルリオーズ自身もそれを認めていたが、当初からオペラ中で演奏する曲として書かれたわけではない。

曲はまずアレグロ・アッサイ・コン・フォーコ、イタリアの民俗舞踏サルタレッロの賑やかな響きで始まる。程なくアンダンテ・ソステヌートとなってイングリッシェホルンに叙情的な主題(オペラではチェッリーニとテレーザの愛の二重唱)が現れ、様々な楽器に広がる。やがてアレグロ・ヴィヴァーチェとなり、躍動的なサルタレッロの主題(オペラでは芸人たちの合唱)が謝肉祭の情景を喚起し、さらに曲頭のサルタレッロ主題も交えつつ、熱狂的な盛り上がりを生み出していく。

(寺西基之)

※1 オペラ・コミック 歌以外にセリフも用いるフランスのオペラ。喜劇的で軽い内容のものが多かったが、後にシリアスな悲劇も作られた。

※2 グランド・オペラ 19世紀前半にフランスで流行した大規模なオペラ。スペクタクルな舞台効果が特徴で、セリフはなくレチタティーヴォを用いる。

作曲年代：1843年

初演：1844年2月3日 パリ 作曲者指揮

楽器編成：フルート2(第2はピッコロ持替)、オーボエ2(第2はイングリッシェホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、シンバル、トライアングル、タンブリン、弦楽5部

ラヴェル： ピアノ協奏曲 ト長調

フランス印象主義作曲家の代名詞的存在であるモーリス・ラヴェル（1875～1937）は、その生涯に2つのピアノ協奏曲を遺した。左手のみで弾かれるためのものと、一般的な両手用である。双方とも独特の魅力を有し、その人気は甲乙つけ難い。

本日演奏される両手用のピアノ協奏曲は、1928年の頃から構想を始め、1929年に作曲が開始されている。しかしその途中、戦争で右手を失ったパウル・ヴィトゲンシュタイン（1887～1961）から左手用のピアノ協奏曲を依頼され、そちらを優先するために中断。その完成（1930年）後に再開され、1931年に仕上げられた。曲想には、ラヴェルの故郷であるバスク地方のラプソディや、ヴァイオリン・ソナタ（1927年）でも聴かれるジャズの要素が、より一段と巧みに織り込まれている。

ラヴェルは作曲の過程で、「（このピアノ協奏曲は）モーツァルトやサン＝サーンスの協奏曲と同じ精神で書かれ」と語っている。

作曲時、ラヴェルはソリストに自らを想定していたが、健康がすぐれず断念。よって初演は、マルグリット・ロン（1874～1966）の独奏、作曲者の指揮で行われた。なお、このピアノ協奏曲は、ラヴェルが演奏家として生涯最後に携わった作品でもある（1933年11月、パドルー管弦楽団を指揮）。

第1楽章 アレグラメンテ ト長調 ソナタ形式 曲はムチの1発で始まる。ピアノのアルペジオの上をピッコロが第1主題を提示。この主題は、バスク民謡（あるいはさらに細かくナバラ州の舞踊音楽）との関係が指摘されている。また、オープニングの複調的な雰囲気は、ストラヴィンスキーの《パトルーシュカ》（1911年）にも似ている。第1主題がトランペットで反復されると少しテンポが落ち、ピアノに第2主題が登場。こちらはやや気怠い感じのスペイン風である。その途中に加わる小クラリネット（とトランペット）のフレーズには、ジャズの影響が明瞭に聴き取れる。

第2楽章 アダージョ・アッサイ ホ長調 3部形式 ピアノが左手で伴奏を鳴らしながら、淡く甘美な名旋律をひとり歌い紡ぐ。ピアノにトリルが始まるとようやくオーケストラが加わり、木管楽器が美しく絡んでゆく。途中からイングリッシュホルンのソロが登場し、ピアノはこれを32分音符で装飾する。

第3楽章 プレスト ト長調 序奏付きトッカータ風楽章（冒頭部を序奏としない見方もある）。序奏は金管と打楽器のファンファーレでスタート。急速に進行する中、小クラリネットやピッコロのシグナルがまつわりついてくる。ファンファーレ楽句でまとめられるとピアノがリズム主題を出す部分に転じる。ここは裏拍にアクセントが付けられ、シンコペーション効果が特徴。続いてピッコロとフルートが始める16

分音符のアルペッジョ部。ホルンの行進曲風部分ではジャズ風なトロンボーンのリリッサンドも聴かれる。ファゴットの走句を経て、次第に高揚してゆき、最後は全曲のスタート（第1楽章冒頭）とは対照的に大太鼓とティンパニの低い一撃でまとめられる。

（松本 學）

作曲年代：1929～31年

初 演：1932年1月14日 パリ サル・プレイエル
マルグリット・ロン独奏 作曲者指揮 ラムルー管弦楽団

楽器編成：ピッコロ、フルート、オーボエ、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ウッドブロック、ムチ、ハーブ、弦楽5部、独奏ピアノ

ドビュッシー： 管弦楽のための《映像》より「イベリア」

フランス近代の作曲家クロード・ドビュッシー（1862～1918）は斬新な音語法のうちにイマージュを映し出す新しい音楽のあり方を開拓したが、《イマージュ（映像）》と銘打たれたシリーズは彼の目指す方向がその題に端的に表れている。

《映像》シリーズは当初は2集各6曲のピアノ曲集として企画され、1903年にデュラン社と出版契約が取り交わされた。第1集は「水の反映」「ラモー賛」「運動」（以上ピアノ独奏）、「イベリア」「悲しいジューグ」「ロンド」（以上2台ピアノ）の計6曲、第2集としては「葉末を渡る風」「そして月は廃寺に沈む」「金色の魚」（以上ピアノ独奏）の3曲のほか題名が決まっていない3曲が予定されていた。

結局もともとの第1集の中の最初の3曲がピアノ独奏用の《映像第1集》として1905年に、さらに当初の第2集の上記3曲がやはりピアノ独奏用の《映像第2集》として1907年に成立する。そして本来第1集の後半に収められるはずだった2台ピアノ用の3曲は1907年頃に管弦楽曲に構想が切り替えられ、うち2曲は題も改められて、管弦楽のための《映像》として完成されたのである（管弦楽のための《映像》は“第3集”といわれるが、各曲の完成年は違い、初演も出版も1曲ごとになされている）。

この“第3集”は先に出たピアノ用の2集の《映像》同様、精妙な響きのうちに題のとおりイマージュの世界が広がる作品で、また後に《海》で究められた管弦楽書法が効果的に生かされている。現行の順番は「ジューグ」「イベリア」「春のロンド」だが、これは完成順でなく、3曲まとめでの演奏では曲順を変更することも多い。3曲はそれぞれイギリス、スペイン、フランスの歌や舞曲と関連付けられている。

本日演奏される第2曲「イベリア」は旋律やリズムにスペイン色が強烈に打ち出された曲。もちろんそのスペイン的素材はドビュッシーらしい斬新な音感覚で扱われている。他の2曲と異なり、この曲自体さらに3つの曲で構成される。

最初の“街から道から”では冒頭から舞曲のリズムがカスタネットを伴って打ち鳴らされ、昼の街や道の様々な風景が描かれる。一転次の“夜の香り”では幽玄な夜の雰囲気が立ちこめ、ゆったりしたハバネラ風のリズムのうちに神秘的な夜の世界が浮かび上がる。途中で回想される前曲の主題もここでは夜のヴェールに覆われる。そして休みなく明るい“祭りの日の朝”に入るが、この暗から明への推移が巧みで、最初かすかに祭りのリズムが起って朝の兆しが表れるも、いったんまた名残り惜しむように夜の気分に戻されてしまい、その後改めて祭りのリズムとともに本当に朝となる。活気ある祭りの気分は次第に盛り上がり、呼び声のようなクラリネットの旋律やヴァイオリンの即興的なソロなどを挟みつつ興奮を高めていく。

(寺西基之)

作曲年代：1905~08年

初演：1910年2月20日 パリ

楽器編成：ピッコロ、フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、小太鼓、タンブリン、シロフォン、チャイム、カスタネット、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部

ラヴェル： 《ダフニスとクロエ》第2組曲

20世紀前期、パリで興行を行っていたロシア・バレエ団の主宰者セルゲイ・ディアギレフ(1872~1929)が当時の革新的な作曲家に次々とバレエ音楽の作曲を委嘱し、それによって多くの優れた斬新なバレエ音楽が誕生したことはよく知られている。

フランスの近代音楽の展開に大きく寄与した作曲家モーリス・ラヴェル(1875~1937)の《ダフニスとクロエ》もまさにディアギレフの依頼によって書かれたバレエ音楽の傑作である。古代ギリシャの田園詩に基づいて振付師・舞踏家のミハイル[ミシェル]・フォーキン(1880~1942)が作成した台本によるバレエで、ラヴェル自身の言葉によると「アルカイズムよりも自分の夢の中のギリシャに忠実であるような、音楽の巨大なフレスコ画を作曲することをめざした」作品だ。

物語の舞台は古代ギリシャ。羊飼ダフニスと牛飼ドルコンと争って乙女クロエを自分のものとするが、クロエは海賊にさらわれる。ニンフらは嘆くダフニスを慰め、パンの神を呼び出す(以上、第1場)。囚われのクロエは海賊に嘆願するが聞いてもらえない。しかしそこにパンの神が現れ海賊を追い散らす(第2場)。夜が明け、

助かったクロエはダフニスと喜びの再会をする。老羊飼ラモンから、パンの神がクロエを救ったのはパンがかつて愛したシリクスの思い出ゆえであることを聞いたダフニスとクロエは、パンとシリクスの愛をパントマイム（無言劇）で演じる。2人はニンフの祭壇の前で愛を誓い、人々はパンとニンフを讃える（第3場）。

作曲者自身「交響的作品」と自負している作品だが、幾つかの動機を巧緻に用いた綿密な展開と4管編成を駆使した色彩感溢れる管弦楽法によって、各場面の情景と気分（スコアには随所に細かくト書きが記されている）を巧みに描き出しながら全体をまさに「巨大なフレスコ画」のようにまとめ上げたその手腕に、ラヴェルの卓越した作曲技法が端的に示されている。作品全体のそうした交響的性格はほぼ1時間近くかかる全曲版でこそ明瞭に浮かび上がるが、精緻かつ大胆自在な書法のうちに情景やイメージを喚起するラヴェルの目覚ましまでの筆遣いは、全曲版からそれぞれひとまとまりの部分のまま抜き出した2つの組曲からも充分味わうことができ、演奏機会という点からは第2組曲が取り上げられることが最も多い。

本日演奏されるのもこの第2組曲で、これは全曲版の第3場のほぼ全体に相当する。この組曲は3部分が続けて演奏され、「夜明け—パントマイム—全員の踊り」という副題がスコア冒頭にまとめて掲載されている。

最初の「夜明け」は日の出とともに目覚めたダフニスとクロエと再会して喜ぶ場面。日の昇る様を示す燦然たる響きには、管弦楽法の魔術師ラヴェルの鮮やかな技が発揮されている。続いて2人がパンとシリクスの愛を演じる「パントマイム」となる。フルートを中心とする精妙な音の動きが印象的だ。そしてダフニスとクロエはニンフの祭壇の前で愛を誓い、人々がパンとニンフを讃えて踊る「全員の踊り」となる。5拍子を軸とするリズムの熱狂的な乱舞が興奮を高めていく終曲である。

なおこのバレエには合唱パートもあるが、それは楽器で置き換えることも可能になっており、本日は合唱なしで演奏される。

(寺西基之)

作曲年代：1909～12年

初演：バレエ全曲／1912年6月8日 パリ ピエール・モントゥー指揮
(第2組曲の初演は不詳)

楽器編成：フルート3（第2、第3はピッコロ持替）、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、カステネット、ハーブ2、チェレスタ、ジュドウタンブル、弦楽5部

B
Series

第863回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.863 B Series

サントリーホール

2018年 10月19日(金) 19:00開演

Fri. 19 October 2018, 19:00 at Suntory Hall

- 指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor
ヴィオラ ● タベア・ツインマーマン* Tabea ZIMMERMANN, Viola
ヴィオラ ● アントワン・タメスティ* Antoine TAMESTIT, Viola
オルガン ● 室住素子** MUROZUMI Motoko, Organ
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

マントヴァーニ：2つのヴィオラと管弦楽のための協奏曲

(2009) (日本初演)* (39分)

Mantovani: Concerto for 2 Violas and Orchestra (2009) (Japan Premiere)

休憩 / Intermission (20分)

サン＝サーンス：交響曲第3番 ハ短調 op.78 《オルガン付》** (35分)

Saint-Saëns: Symphony No.3 in C minor, op.78, "Organ"

- I Adagio - Allegro moderato
Poco adagio
II Allegro moderato
Maestoso - Allegro


主催：公益財団法人東京都交響楽団

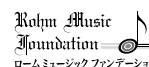
後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：  明治安田生命

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁

公益財団法人アフィニス文化財団  Affinis
ETIQUETTE

公益財団法人 ロームミュージックファンデーション  Rohm Music
Foundation
ロームミュージックファンデーション

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

Tabea ZIMMERMANN

Viola

タベア・ツィンマーマン

ヴィオラ



©Marco Borggreve

3歳でヴィオラを始める。フライブルク音楽大学、ザルツブルク・モーツァルテウム大学で学ぶ。ジュネーヴ国際音楽コンクール（1982年）、モーリス・ヴュー国際ヴィオラ・コンクール（83年）、ブダペスト国際音楽コンクール（84年）で優勝。ベルリン・フィル、ロンドン響、パリ管、スイス・ロマンダ管、イスラエル・フィルなどと共演を重ねており、ザルツブルク音楽祭をはじめとする国際音楽祭にも出演。ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン教授。

Tabea Zimmermann studied at Musikhochschule Freiburg and Universität Mozarteum Salzburg. She won the 1st prizes at 1982 Concours de Genève, 1983 Concours International d'Alto Maurice Vieux, and 1984 Budapest International Music Competition. Zimmermann has performed with orchestras such as Berliner Philharmoniker, London Symphony, and Orchestre de Paris. She is a professor at Hochschule für Musik "Hanns Eisler" Berlin.

Antoine TAMESTIT

Viola

アントワン・タメスティ

ヴィオラ



©Julien Mignot - Harmonia Mundi

「ヴィオラ・スペース」共同芸術監督。2017/18シーズンはフランクフルト放送響、スタヴァンゲル響、ウィーン・コンツェルトハウス、ドルトムント・コンツェルトハウスのレジデント・アーティストを務めた。トリオ・ツィンマーマン創立メンバー。ロンドン響、ウィーン・フィルなどと共演しているほか、新作の世界初演や初収録にも多く携わっている次世代を代表する天才ヴィオラ奏者。使用楽器は1672年製ストラディヴァリウス。

Antoine Tamestit is an established viola prodigy representing the next generation. He is Co-Artistic Director of VIOLA SPACE (Japan). He was Artist in Residence of Frankfurt Radio Symphony (hr-Sinfonieorchester), Stavanger Symphony, Wiener Konzerthaus, and Konzerthaus Dortmund for the season 2017/18. Tamestit has performed with orchestras including London Symphony and Wiener Philharmoniker, as well as in many world premiere performances and premiere recordings. He plays on a viola made by Stradivarius in 1672.

MUROZUMI Motoko

Organ

室住素子
オルガン



東京大学文学部美学芸術学科を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科（オルガン専攻）卒業、同大学院修士課程修了。安宅賞受賞。1989～97年、水戸芸術館音楽部門主任学芸員を務め、吉田秀和館長賞受賞。都響とは、フルネとの《オルガン付》、ベルティーニやインバルによるマーラー・シリーズなどで共演、ほかに新日本フィル、N響、サイトウ・キネン・オーケストラなど共演多数。日本オルガニスト協会会員。

After graduating from Department of Aesthetics of Tokyo University, Motoko Murozumi studied organ at Tokyo University of the Arts and obtained a master's degree from the same university. From 1989 to 1997, she served as a chief curator of Department of Music of Art Tower Mito. She was awarded Hidekazu Yoshida Director Prize. She is a member of Japan Association of Organists.

マントヴァーニ： 2つのヴィオラと管弦楽のための協奏曲 (2009)

私が音楽を書き始めてからというもの、「対立 conflict」というアイデアは私の主要な関心事の一つである。それは協奏曲というジャンル、そして空間化することに対する私の愛好心を増大させ続けてきたアイデアだ。ここ何年か私は、いくつかの楽器に独奏パートを持たせる曲を作ることによって、その愛する2つのアスペクトを統合させようと試みてきた。本作品では、2つのヴィオラに重要な役割が与えられている。この長い作品(35分)において2つの楽器は、(同じリズムによる)融合という主要素か、あるいは、素速い音の受け渡しにおける応答によって支配される。応答は(空間と関連した)一つの響きから別の響きへとというパッセージにより、1本の旋律であるかのような錯覚をもたらす。コントラストの追求は別として、何のロジックもなくいくつかの要素が並列的に提示されることで、「対立」が形式レベルでも起こっている。反復によって、比較的効率のよい方法にも頼りながら、形式は統一感を持ったものとなる。

フランス放送、リエージュ・フィル、WDR (西ドイツ放送) からの委嘱を受けたこの協奏曲は、初演者である2人のアーティスト、タベア・ツィンマーマンとアントワン・タメスティに捧げた。

(ブルーノ・マントヴァーニ／飯田有抄訳)

Mantovani: Concerto for 2 Violas and Orchestra (2009)

Since I began writing music, the idea of conflict is one of my primary preoccupations. It has fuelled both my fondness for the concerto genre, and for spatialization. Over the last several years, I have tried to synthesize these two aspects in the composition of pieces with a solo part attributed to several like instruments. For this piece, two violas have been given the principal role. During this lengthy piece (35 minutes), both instruments are either governed by a principal of fusion (identical rhythms), or responses in rapid relays that give the illusion of a single melodic line enhanced by the passage from one sonority (in relation to a space) to another. Conflict is also present on a formal level, in so far as certain elements are presented in juxtaposition, without the slightest logic aside from the quest for contrast. Due to a play between repetitions, the form becomes coherent, relying as well on a relative economy of means.

Commissioned by Radio France, the Philharmonic Orchestra of Liege and the WDR [West Deutsch Rundfunk - West German Radio], this concerto is dedicated to Tabea Zimmerman and Antoine Tamestit, the artists who premiered it.

Bruno Mantovani

マントヴァーニ： 2つのヴィオラと管弦楽のための協奏曲 (2009)

戦後のヨーロッパを席卷した前衛音楽から聴衆が離れていってしまった主たる要因は「不協和音が耳に優しくないこと」と「流れが知覚できないこと」という2点に集約されるだろう。前者は慣れの問題であり、積極的に聴き続けることである程度解決するが、後者については専門的な教育を受けた上で楽譜を事前に読み込まない限り、把握はできない。だから高度に知的な作曲技法を追求することで、戦後のフランス音楽を牽引したピエール・ブーレーズ (1925～2016) でさえ、1970年代半ばになると徐々に知覚しやすい音楽へと変化していったのも止むなきことであった。ブーレーズより下の世代でも、トリスタン・ミュライユ (1947～) やフィリップ・マヌリ (1952～) といった作曲家たちが1980年代以降、知覚の問題に取り組んでいることから分かるように、この40年ほどのフランス音楽は「知的な作曲技法」と「知覚可能な音楽」をどう両立するかが課題となっている。

2010年に36歳の若さでパリ国立高等音楽院院長に就任したブルーノ・マントヴァーニ (1974～) は、初期の作品《霧雨の白熱》(1997 / ソプラノサクソフォンとピアノ) からほぼ一貫して複数の楽器を絡ませ合いながら短い音型を反復、徐々に拡大発展させていくという手法で音楽を構成してきた。協奏曲的作品である《表情豊かに》(2003 / バスクラリネットとオーケストラ) では独奏楽器を核にして音型の拡大発展が行われ、2008年に作曲された本作ではそれに加え、セクションごとを特徴づけるフレーズが登場。より知覚しやすい音楽へと変化している。

作品は大きく分けると2部分で構成され、それぞれの部分が更に細かいセクションへと分かれていく。第1部は2つのヴィオラによるカデンツァで始まる。まずは「①同音連打」がセクションを特徴づける要素となっていき、あいだにその後のセクションで用いられる主題が提示されていく。セクションを特徴づける要素はその後、「②2つのヴィオラのピッツィカートによる噛み合わないリズム」「③管弦楽内のヴィオラがソリストと混じり合う下行音型」「④2つのヴィオラが切れ目なく反復する下行音型」「⑤弦楽器と打楽器とピアノによる打撃音」と移り変わっていく。⑤のセクションはそれまで登場した音型が組み合わせられていく事実上の展開部にもなっており、最終的に第1部冒頭カデンツァの同音連打が短く回帰する。

第2部はまた2つのヴィオラによるカデンツァから始まり、その後のセクションで用いられる新しい主題を提示する。とりわけ重要になるのは開放弦 (弦楽器で弦を指で押さえずに音を出す) のサウンドで、作品に明るい響きを少しずつもたらしていく。再び管弦楽が加わりだすと、第1部を変奏するように展開し始め、まずは①のセクションに始まり、②と④の要素を組み合わせた反復音型によるセクションが続く。その

反復音型が終わり、突如として暴力的な響きに支配されるところから最後のセクションとなり、③の要素を間に挟み込みつつ、クライマックスを築き上げていく。最終的には、開放弦の明るい響きを後景に従えたソリストが静かに語り続けるも、管弦楽による暴力的なサウンドに飲み込まれていってしまう。

(小室敬幸)

作曲年代：2008年

初演：2009年3月6日 パリ

ヴィオラ／タベア・ツィンマーマン、アントワン・タメスティ

バスカル・ロフェ指揮 フランス放送フィル

楽器編成：フルート3（第2はピッコロ持替、第3はアルトフルート持替）、オーボエ3（第3はイングリッシュホルン持替）、クラリネット3（第3はバスクラリネット持替）、ファゴット3（第3はコントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シロフォン、タムタム、チャイニーズシンバル、テンプルブロック、ボンゴ、コンガ、ゴング、ヴィブラフォン、小太鼓、シンバル、トムトム、大太鼓、マリмба、金床、ギロ、ハーブ、ピアノ、弦楽5部

サン＝サーンス：

交響曲第3番 ハ短調 op.78《オルガン付》

作曲家としては楽壇を牽引する立役者。ピアノやオルガンは超一流の腕前。おまけに詩作や数学や自然科学の分野でも玄人はだし。シャルル・カミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)こそは、往時のフランスきっての“総合的文化人”だった。おなじみの組曲《動物の謝肉祭》が、持ち前の知性とユーモアとエレガンスを寛いだ形で伝えるものだとすれば、同じ1886年に生まれた交響曲第3番は、彼のシリアスな面を何よりも雄弁に示す傑作である。

曲はロンドンのフィルハーモニック協会の委嘱によって書かれ、完成後にはサン＝サーンス自身が「持てるもの全部をつぎこんだ。これほどの達成感はいもう得られまい」と語っている。そして実際、彼がこのジャンルに舞い戻るとは二度となかったし、盛り込まれた着想は確かに多彩を極める。

まず耳にも明らかなのは、副題の由来でもあるオルガン、そしてピアノまで用いて、オーケストラの音色のパレットを広げたこと。次に構成原理として導入された“循環主題”という手法。作品の核をなす主題が絶えず変容を伴いながら登場して音楽の流れを導く書式は、リスト(1811～86)の交響詩、ひいてはワーグナー(1813～83)の楽劇と共通点を持つ。それを標題音楽や舞台作品ではなく、交響曲にサン＝サーンスは応用したわけである。その点で大きな影響を受けたリストに、サン＝サーンスがこの曲を献呈しようと思いついたのも納得のいく話だ。彼の申し出は感謝の返事とともに首尾よく受理されたのだが、しかしそのリストは初

演から2ヵ月後の1886年7月に世を去ってしまい、初版譜の刊行時には「フランツ・リストの思い出に捧げて」という言葉が掲げられることとなった。

さらに形式面もユニーク。従来の交響曲の枠組に沿いながらも、以下のとおり、それぞれ対照的な図式を描く2楽章構成に作品がまとめられている。

第1楽章 前半部はアダージョの短い序奏と、ソナタ形式のアレグロ・モデラートからなる。後者に入ってすぐ弦楽器の奏でる第1主題が、全曲に波及する循環主題である（最初のうちは細かくリズムを分割し、本来の姿を曖昧にしか見せない巧妙な筆さばき）。そこに序奏の動機が対置されていく。波打つような動きの第2主題は木管楽器が提示。各主題の展開と再現を経て次第に音勢が弱まると、オルガンがペダル音を含むハーモニーで静かに登場し、後半部ポコ・アダージョが開始。これは緩徐楽章にあたり、それまで抱えていた内面の相克に宗教的浄化が与えられていくような趣だ。

第2楽章 前半部はスケルツォに相当。循環主題も活用したアレグロ・モデラートと、快活にして色彩感も豊かなプレストが交替する形で進む。後者が2度目に現れると、新しい重要なモチーフを用いた静かな推移句へと流れ込む。続く後半部は、まずマエストーソのテンポにより、オルガンの輝かしいコードを伴いながら祝典的なムードで幕を開ける。アレグロに転じてからは循環主題も確信に満ちた表情で歩を進め、先行楽章の動機群も様々な形で回帰を果たす。すべての不安を払拭した後のコーダで待ち受けているのは、壮麗無比なクライマックス。

（木幡一誠）

作曲年代：1886年

初演：1886年5月19日 ロンドン 作曲者指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ピアノ（連弾）、オルガン、弦楽5部



第864回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.864 A Series

東京文化会館

2018年10月24日(水) 19:00開演

Wed. 24 October 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ソプラノ ● アウシュリネ・ストウンディーテ * Ausrine STUNDYTE, Soprano

バリトン ● アルマス・スヴィルパ * Almas ŠVILPA, Baritone

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

シュレーカー：室内交響曲 (25分)

Schreker: Kammer-symphonie

休憩 / Intermission (20分)

ツェムリンスキー：抒情交響曲

～ラビンドラナート・タゴールの詩による7つの歌 op.18 * (48分)

Lyrische Symphonie - in sieben Gesängen nach Gedichten von Rabindranath Tagore, op.18 *

- | | |
|----------------------------------|--------------|
| I Ich bin friedlos | 不安な私は |
| II Mutter, der junge Prinz | お母様、若い王子様は |
| III Du bist die Abendwolke | お前は夕べの雲 |
| IV Sprich zu mir, Geliebter | 話して下さい、愛しい方 |
| V Befrei' mich von den Banden | お前の縛めから解いてくれ |
| VI Vollende denn das letzte Lied | 最後の歌を歌い終えて |
| VII Friede, mein Herz | 穏やかに、わが心よ |

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。



Ausrine STUNDYTE

Soprano

アウシュリネ・ストウンディーテ
ソプラノ

ヴィリニウス（リトアニア）生まれ。故郷ヴィリニウスとライプツィヒで学ぶ。近年は大野和士指揮『ムツェンスク郡のマクベス夫人』、メータ指揮『フィデリオ』（演奏会形式）などに登場。これまでにルイーダ、ユロフスキ、テイト、ノセダらの指揮で『炎の天使』『メフィストフェレ』『タンホイザー』『トスカ』『ヘリアーネの奇蹟』『烙印を押された人々』『メキシコの征服』『青ひげ公の城』『サロメ』などに出演した。

Ausrine Stundyte was born in Vilnius (Lithuania) and studied in her hometown and in Leipzig. Stundyte has performed roles in operas including *Lady Macbeth of the Mtsensk District*, *Fidelio*, *The Fiery Angel*, *Mefistofele*, *Tannhäuser*, *Tosca*, *Das Wunder der Heliane*, *Die Gezeichneten*, *Die Eroberung von Mexico*, *Duke Bluebeard's Castle*, and *Salome* under batons of Ono, Mehta, Luisi, Jurowski, Tate, and Nosedá.



Almas ŠVILPA

Baritone

アルマス・スヴィルパ
バリトン

リトアニア生まれ。故郷クライペダの音楽院を卒業、ヴィリニウスでも学ぶ。チューリヒ歌劇場オペラ・スタジオを経てカールスルーエ・バーデン州立劇場に所属、1997年にエッセン・アールト劇場の音楽祭メンバーとなる。これまでにザルツブルク音楽祭、ライン・ドイツ・オペラ、ジュネーヴ大劇場、ドレスデン州立歌劇場、デンマーク王立オペラなどに登場。

『エレクトラ』『ナブッコ』『さまよえるオランダ人』『リゴレット』『ローエングリン』などに出演した。

Almas Švilpa was born in Lithuania. He is an alumnus of Music Conservatory in his hometown Klaipėda and completed his studies in Vilnius. After acting as a member of the Studio of Opernhaus Zürich, he joined Badisches Staatstheater Karlsruhe. In 1997 Švilpa became a fest member with Aalto-Musiktheater (Essen). He has appeared at Salzburger Festspiele, Deutsche Oper am Rhein, Grand Théâtre de Genève, Semperoper Dresden, and Royal Danish Opera, among others.

シュレーカー： 室内交響曲

交響曲が曲がり角に差し掛かった時代の交響曲——フランツ・シュレーカー（1878～1934）の室内交響曲を一言でまとめると、このようになるかもしれない。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）を嚆矢として、19世紀を通じて、西洋音楽のメイン・ジャンルに躍り出た交響曲。それは例えば、ソナタ形式や4楽章形式をはじめとする「骨」のまわりに、様々な動機やメロディがついた「肉」によって構成される「魚」のようなものだった。そして、「骨」や「肉」という前提があってこそ、オーケストラによって醸し出される響きという名の「鱗」が煌めく、という構造を持っていた。

ところが、交響曲——さらにはそれを生み出した西洋音楽——は、進歩進化や巨大化を目指した歩みの末に、20世紀初頭には曲がり角に差し掛かってしまう。

そこへ登場したのが、「交響曲」を謳いながらも、新たな地平を目指そうとした「室内交響曲」。その先駆的存在となったのが、アルノルト・シェーンバルク（1874～1951）が1906年に作った室内交響曲第1番だ。西洋音楽の基本を成してきた調性を意図的に逸脱し、弦楽器よりも管楽器のほうが多いという異質な響きを特徴とするこの作品は、初演当時、激しい賛否両論を巻き起こした。このようなシェーンバルクに共感し、20世紀初頭のウィーンの新たな音楽界を形成していったシュレーカーも、そのちょうど10年後に室内交響曲を書く。

といってもシュレーカーの場合、シェーンバルクの室内交響曲——19世紀から連続と続くロマン派音楽の残り香を宿すいっぽう、そうした音楽時代の破壊と刷新を目指した——とは、立場を異にする。それは先ほどの「魚」のたとえを用いるならば、各パートの動きが細かく指定された小オーケストラが作り出す「鱗」の煌めきを最優先し、その上で肉付きや骨格を決めてゆく——といった具合に、交響曲の基本構造を逆転させた試みだった。シュレーカーが教授を務めていたウィーン音楽アカデミー（前身は、彼自身が若き日に学んだウィーン楽友協会音楽院）の創設100年を記念し、そこに教授として勤める名うての演奏家たち（一部はウィーン・フィル団員）から成る臨時のオーケストラによる初演が念頭に置かれていたという事情も、こうした作曲姿勢に少なからぬ影響を与えたのだろう。

全体は、約30分弱の演奏時間を要する単一楽章から成っている。となると、4楽章構成を基本としてきた伝統的な交響曲への挑戦のようにも思えるが、決してそうではない。

「ゆっくりと、たゆたうように (Langsam, Schwebend)」と指示された〈導入部〉に続き、徐々にテンポや楽想が盛り上がり、**アレグロ・ヴィヴァーチェ**の〈主部〉(伝統的な交響曲では第1楽章に相当)となり、再び〈導入部〉を仲立ちとして、**アダージョ**(第2楽章/緩徐楽章に相当)に入ってゆく。そして全体の後半をほぼ占めるのが、活発かつ狂騒的な性格も具えた**スケルツォ**(第3楽章に相当)。このスケルツォが異様なまでに長く巨大な点が伝統的な交響曲とは異なる点だが、最後は再び〈導入部〉が変形された形で戻り(第4楽章に相当)、全ては静寂の中に消えてゆく。

つまり、従来の交響曲のあり方を転覆するのではなく、そこに新たな可能性を接ぎ木しようということだ。となるとメロディや和声も、シェーンベルクのようにそれらの破壊を目指して無調へと突き進むのではなく、あくまで調性にに基づいた音楽の可能性を極限まで突き進めたがゆえに、結果として無調ぎりぎりの瞬間がそこかしこで生まれてゆく。そして、この「調性にに基づいた音楽の可能性を極限まで突き進める」姿勢こそが、千変万化の楽器の響きを最優先する当作品のあり方を生み出したかもしれない。

つまり、行き詰まりを見せ始めた西洋音楽において、交響曲の王道と考えられてきた「骨」や「肉」ではなく、「鱗」の部分でしかなかった要素を通じ、新たな息を吹き込む試み。「響き」に人一倍敏感な感覚を持ち、それを終生にわたって自らの創作の糧としていったシュレーカーならではの足跡。

(小宮正安)

作曲年代：1916年

初演：1917年3月12日 ウィーン 作曲者指揮

ウィーン音楽アカデミー教授およびウィーン・フィル団員から成るオーケストラ

楽器編成：フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、トライアングル、シンバル、タムタム、シロフォン、グロッケンシュピール、ハープ、ピアノ、チェレスタ、ハルモニウム、弦楽(第1・2・3・4ヴァイオリン、第1・2ヴァイオラ、第1・2・3チェロ、コントラバス)

ツェムリンスキー：

抒情交響曲〜ラビンドラナート・タゴールの詩による7つの歌 op.18

まず、この作品のタイトルにも冠されている「抒情(ドイツ語の形容詞では *lyrisch*、名詞は *Lyric*)」とは何だろう? 語源的には、リラ(Lira)つまりは豎琴を伴奏とした歌という意味合いで、その多くは、たとえばヨーロッパ中世の吟遊詩人の多くの歌のように、男女の愛、しかもその半分は実ることのない男女の愛を扱ったものになるだろう(なお、中世世界への憧れを強烈に宿した19世紀以降のロマン派は、文学の世界において数多の「抒情詩 *Lyric*」を生み出し、それにまつ

わるたくさんの曲が書かれた)。

ロマン派最後の光芒の中に生きたアレクサンダー・フォン・ツェムリンスキー (1871 ~ 1942) も、例外ではない。彼が手がけた《抒情交響曲》は、バリトン独唱とソプラノ独唱が、交互にそれぞれの愛を歌い上げながらも、男女の愛の交流を表現する二重唱に発展することはついぞなく、最後は愛の破綻に終わるからである。ちなみにテキストは、インドの文学者であるラビンドラナート・タゴール (1861 ~ 1941) が 1913 年に英語で発表した『園丁 (gardiner)』という詩集のドイツ語訳から採られているが、ツェムリンスキーによる取捨選択の方法が、非常に意味深長だ。

『園丁』は計 85 の詩から成っており、王子と王女の悲恋を通じ、愛する人との別れ、あるいは人生の儚さへの想いといったものが、インドのベンガル地方の悠久の自然を背景に紡がれてゆく。こうした意味においては、ツェムリンスキーが《抒情交響曲》を書くにあたって規範とした、グスタフ・マーラー (1860 ~ 1911) の交響曲《大地の歌》と共通するものだろう。《大地の歌》は古の中国の詩、《抒情交響曲》は同時代のインドの詩という違いこそあれ、東洋の作品であり、それらは様々な点において行き詰まっていた 20 世紀初頭の西洋社会の価値観に風穴を開ける思想を具えていると見なされていた (また両者ともに、大管弦楽伴奏付きの独唱曲といった体裁をとりながら、あえて「交響曲」という呼び名が用いられている点も、西洋文化の産物の一つである交響曲を袋小路から救い出そう、という姿勢の表れに他ならない)。

ただしツェムリンスキーは、『園丁』所収の詩からあえて 7 つだけを選び取り、もともとそれらが配置されていた順番も変えてしまった。結果、当作品のストーリー展開は、男女の想いのすれ違いを経て、1 人取り残されてしまった男性の悲嘆といった、ツェムリンスキーの作品ではお馴染みのものと化している (ツェムリンスキーは、ウィーン社交界の若き才媛であったアルマ・シントラー [1879 ~ 1964] を熱愛していたのだが、彼女が彼を捨ててマーラーの妻となってしまったことから、この失恋の痛みを一生負い続け、その体験をことあるごとに自らの作品に投影させていった)。

なおこうした「オリジナルの価値の転倒」は、オーケストレーションにも見られよう。マーラーばりの大編成のオーケストラを用いながら、マーラーが行った以上に、大管弦楽によるマッシヴな響きより、多様な楽器の織りなす精妙な響きや絡み合い——それは例えばシュレーカーの室内交響曲と同じ方向性を目指したものといえよう——が意識されているからだ。ベートーヴェン以降のスタンダードなオーケストレーションにおいては、特殊な楽器とされてきたハルモニウムやチェレスタが、要所々々で決めの響きをきかせるのもその一つ。

というわけで《抒情交響曲》は、タイトルからしてロマン派の残照を宿しながらも、それを内部から少しずつ崩し、新時代の地平を切り開いていったツェムリンスキーの立ち位置を如実に物語っている。

作品は切れ目なく続く7つの楽章から成っている。

(1)バリトン独唱が恋の情熱と傷みを激しく歌い上げる第1楽章「不安な私は」、ソプラノ独唱が王女の心のときめきを不安げな表情とともに描く第2楽章「お母様、若い王子様は」。

(2)一転して静かな曲想の中にバリトン独唱が恋人へ寄せる遥かな想いを歌う第3楽章「お前は夕べの雲」^(※)、それに応えるかのようにソプラノ独唱が愛しい男性への思慕をつづる第4楽章「話して下さい、愛しい方」。

(3)恋の痛みには耐えきれなくなった男性の想い(バリトン独唱)が爆発する第5楽章「お前の縛めから解いてくれ」、そのような男性に対し女性(ソプラノ独唱)が別れを告げる第6楽章「最後の歌を歌い終えて」。

(4)バリトンが、1人残された男性の孤独と、失った恋人への追想を纏綿^{てんめん}と語る第7楽章「穏やかに、わが心よ」。

……といった具合に、全体は4つの部分に基づいている、つまりは伝統的な交響曲の構成を踏まえているともいえよう。

いずれにしても、すれ違う男女の心の機微を描くのは独唱だけではない。それ以上に雄弁に彼らの心境を表現してみせるのがオーケストラであり、交響詩やオペラで作曲家としてのキャリアを積んできたツェムリンスキーの腕が冴える。彼が、歌曲ともカンタータともいえるこの作品を、あえて「交響曲」と呼んだ所以がここにある。

(小宮正安)

※アルバン・ベルク(1885～1935)は1925～26年に弦楽四重奏のための《抒情組曲》を書き、ツェムリンスキーに捧げた。この作品は《抒情交響曲》からタイトルを取っており、第4楽章には《抒情交響曲》第3楽章(「お前は夕べの雲」と歌われる部分)の引用がある。しかもベルクの没後、《抒情組曲》はハンナ・フックス＝ロベッティン(1896～1964)との道ならぬ恋が主題となっていたことが判明。音楽史における“満たされぬ恋の痛み”の系譜はベルクによって受け継がれた。

作曲年代：1922～23年

初演：1924年6月4日 ブラハ 作曲者指揮 ブラハ新ドイツ劇場管弦楽団

楽器編成：フルート4(第3、第4はピッコロ持替)、オーボエ3(第3はイングリッシュホルン持替)、クラリネット3(第3は小クラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット3(第3はコントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、タンブリン、シロフォン、ハーブ、チェレスタ、ハルモニウム、弦楽5部、独唱(ソプラノ、バリトン)